東方學報 京都第85冊(2010)：616－595頁

紡績系在華紡進出の歴史的背景

森　　時　彦

は　じ　め　に

1880年代前半に呱々の聲をあげた日本の近代紡績業は，80年代後半の第一次紡績ブームを經て，早くも1890年には部分的な生產過剩に起因する最初の恐慌を經驗した。「1890年恐慌」と稱されるこの危機を契機に，日本紡績資本は新たな市場を求めて中國市場への商品輸出を試驗的に開始した。

一方1880年代以來長く中國の在來織布業向け太糸市場をほとんど獨占してきたインド綿糸（最初10－20番手，後10番手中心）は，1890年における上海機器織布局の一部操業開始にともなう中國國產綿糸（14番手中心）の登場，日清戰爭以降中國への輸出ドライブを本格化させた日本綿糸（16番手中心）の猛追をうけて，20世紀にはいると中國市場をほぼ三分する狀態に追い込まれていたが，1914年にはついに日本に首位の座を明け渡すことになった。

しかしその日本も，第一次世界大戰の勃發とともに國內兼營織布用原糸の需要急增にともなう輸出余力の減退と賃金上昇などの壓力による輸出綿糸價格の高騰，中國輸入關稅の實質5％への引き上げ，中國國產綿糸の競爭力向上，二十一カ條反對ボイコットをはじめとする日本製品排斥の影響など，いくつかの要因が重なり，對中國向け綿糸輸出（香港經由を含む）は，1915年の158萬7千擔をピークに急減し，1919年にはほぼ3分の1の57萬6千擔にまで減少した。

しかも中國紡績業の保有紡錘數は，日本綿糸が首位に踊り出たのと同じ1914年に103萬1千錘を記錄して，近代紡績業發展の度合を示す一つの目安とされる100萬錘を突破し[1]，その後も1918年148萬6千錘，1920年283萬3千錘と增加の一途をたどった。その結果，中國における綿糸自給率は1912年の38.9％から1918年には71.6％にまで上昇し，國產綿糸が中國市場の3分の2以上を占有するに至ったものと推計される[2]。

1）趙岡等『中國綿業史』聯經出版事業公司，1977年，286頁
2）拙著『中國近代綿業史の研究』京都大學學術出版會，2001年，159頁

このような動向を受けて，1920年前後には日本國內の巨大紡績資本が擧って，上海さらには青島に次々に現地工場を建設する雪崩現象が出來した。「紡績系在華紡の進出」とも稱されるこの現象は，世界史上でも稀にみる規模の資本輸出をもたらし，東アジアにおける綿工業の構造的再編を結果することになった。本稿では紡績系在華紡進出の動機を，日本近代紡績業誕生以降における東アジア規模の歷史的背景に求めるとともに，なかでも特に東アジアに流通する綿糸の平均番手に的をしぼって考察を進めていく。

1，日本紡績業と中國市場

1880年代に成長をはじめた日本の近代紡績業は，國內太糸市場をインド綿糸から奪回することによって需要先を確保したが，「1890年恐慌」を機にその傾向をいっそう強め，1890年代半ばにインド綿糸をほぼ驅逐し終わった。しかしその一方では，狹隘な國內市場におけるパイの爭奪に見切りをつけ，よりパイの大きい海外市場，とりわけ中國市場への商品展開を模索しはじめ，圖表－1のように「1890年恐慌」に際して，わずか31梱ではあるが中國への試行的輸出を行った。

「1890年恐慌」を契機に細々とはじまった日本綿糸の對外輸出は，その後日淸戰爭後恐慌（1897－98年）の打開策などが效果を發揮して，1897，98，99年の三年にわたって大幅な增加をみた。日淸戰爭終結の1895年にはわずか11,776梱（35,328擔）にすぎなかった輸出高は，戰後恐慌の進行とともに急增しはじめ，97年140,116梱（420,348擔），98年229,445梱（688,335擔）と鰻のぼりに增加し，99年には98年2月以降實施された上海・香港における輸出日本綿糸に對する橫濱正金銀行の低利融資の實行も手傳って，一擧に341,202梱（1,023,606擔）に達し，初めて100萬擔の大臺を突破した。この年の日本國內生產に占める綿糸輸出高の比率は45％を超えた。

1895－99年の5年閒は，98年に保有紡錘數が100萬錘を超えた[3]ことが象徵するように，日本紡績業の生產力は飛躍的に增大し，國內生產高は95年の383,565梱から99年の785,612梱へと402,047梱のプラスで倍以上に增加したが，そのうち329,406梱，實に82％は對中國を主とする輸出高の增加が消化していたことになる。

しかしその後19世紀末から20世紀初頭にかけての5年閒は，義和團事件の影響，インド綿糸の卷き返しといった要因のほか，圖表－2に顯著なように，1897年における日本の金本位制採用まで100圓當り73兩近邊で安定していた上海宛外國爲替相場が，それ以降

3）正確には102萬7千錘，高村直助『日本紡績業史序說』上，塙書房，1971年，207頁

圖表－１　日本の綿糸需給状況

單位＝梱

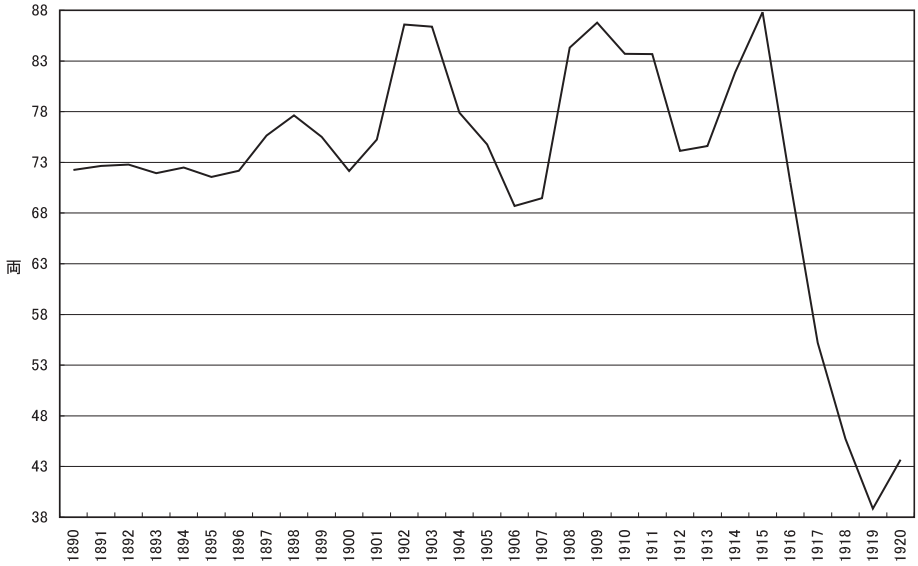
年＼項目	國内生産高	綿糸輸入高	綿糸輸出高	織布用原糸	國内供給高	輸出比率（%）
1890	108,374	106,588	31		214,931	0.03
1891	160,207	58,123	108		218,222	0.07
1892	213,489	81,534	109		294,914	0.05
1893	222,223	65,174	1,053		286,344	0.47
1894	304,584	53,555	11,796		346,343	3.87
1895	383,565	49,876	11,776		421,665	3.07
1896	428,864	67,373	41,916		454,321	9.77
1897	544,461	54,555	140,116		458,900	25.73
1898	670,067	54,563	229,445		495,185	34.24
1899	757,315	27,369	341,202	22,069	421,414	45.05
1900	645,432	30,170	208,732	26,172	440,698	32.34
1901	660,509	19,982	209,173	32,452	438,866	31.67
1902	770,833	8,993	197,481	51,386	530,959	25.62
1903	801,738	3,539	307,201	51,928	446,148	38.32
1904	695,212	1,792	257,307	56,210	383,487	37.01
1905	905,536	7,450	267,383	91,135	554,468	29.53
1906	945,165	20,117	267,348	101,701	596,233	28.29
1907	983,482	5,951	226,472	110,657	652,304	23.03
1908	878,570	4,552	167,842	119,191	596,089	19.10
1909	1,025,244	3,204	258,878	143,471	626,099	25.25
1910	1,134,780	1,016	347,633	177,994	610,169	30.63
1911	1,129,267	1,843	285,009	206,245	639,856	25.24
1912	1,352,209	1,895	374,933	233,907	745,264	27.73
1913	1,517,982	1,266	468,736	277,899	772,613	30.88
1914	1,666,181	607	569,990	309,660	787,138	34.21
1915	1,720,264	588	575,891	311,582	833,379	33.48
1916	1,925,579	660	547,147	341,034	1,038,058	28.41
1917	1,923,841	904	470,852	356,927	1,096,966	24.47
1918	1,803,866	1,088	421,512	400,754	982,688	23.37
1919	1,920,782	8,907	230,333	449,471	1,249,885	11.99
1920	1,618,979	5,121	304,925	474,128	845,047	18.83

資料）1890 ～ 98 年は，高村直助『日本紡績業史序説』上 183 頁，1899 ～ 1914 年は，同書下 82 頁，15 年以降は深澤甲子男『紡績業と綿絲相場』附錄 3 頁

備考）1903－1914 年の間は高村・深澤両書にデータが記載されているが，國内生産高と織布用原糸のデータにいくつか不一致が見られる。本稿では高村氏のデータに従った。また國内供給高は國内生産高＋綿糸輸入高－織布用原糸の式で再計算した。

變動が大きくなり，特に 1902 年には 100 圓當り 86.6 兩という極端な銀安に振れた結果，輸出綿糸は 19 萬 7 千梱と 1899 年の半分近くに激減したのをはじめ，1903 年の 30 萬 7 千梱を例外として，ほぼ 20 萬梱前後で低迷した。さらに 1905 年の日露戦争終結以降になると，日清戦争終結以降のような現象は起らず，逆に 1907 年アメリカ發の世界恐慌，それと密接に關連する日本の戦後恐慌，そして國際的な銀塊相場の暴落にともなう中國金融の恐慌と上海宛外國爲替相場の大幅な銀安傾向（圖表－２のように，100 圓當り 1908 年の 84.31 兩か

圖表－2　上海宛爲替相場（100 圓當り兩）



資料）『日本經濟統計總觀』朝日新聞社，1966 年復刻版

ら，09 年には 86.77 兩にまで下落し兩は對圓で最安値を更新した）につられた綿糸輸入の激減などが重なって，1908 年における日本綿糸の對外輸出は，16 萬 8 千梱と日清戰爭後の 1897 年の水準にまで後戻りした。この戰後恐慌を乗り切るため大日本紡績聯合會は，1908 年 1 月から 10 年 4 月まで 2 年以上にわたってかつてない規模の第 5 次操業短縮を實施する一方，08 年 3 月からは綿糸輸出奬勵のために景品券を發行するとともに，09 年 1 月より平均輸出率以上の輸出を行う加盟各社に對して超過分相當の休錘を免除するなどの措置を骨子とする輸出奬勵策を實施した[4)]。その結果，日本綿糸の對外輸出は，1908 年をボトムに再び增加に轉じて，1910 年には 34 萬 7 千梱を超え，1899 年の 34 萬 1 千梱を拔いて最高を記錄した。

以上のように，日本紡績業は最初の「1890 年恐慌」を契機に輸出ドライブを始動したのち，1897－98 年の日清戰爭後恐慌，1907－08 年の日露戰爭後恐慌といった大規模な恐慌のたびに輸出ドライブを強め，新しい市場の開拓に乗り出したのであるが，その輸出先割合は圖表－3 に鮮明なように，1908 年後半年に韓國向けが急增したため一時 77％ に低下したのを除けば，香港を含む中國向け割合が一貫して 90％ 前後を占めていたことも銘記

4）高村直助『日本紡績業史序說』下，塙書房，1971 年，176－77 頁

圖表－３　日本綿糸對中國・香港輸出數量・金額　　單位＝（上段）擔・（下段）圓

	中國	香港	合計	年合計	擔當り價格	全輸出	中國香港%
1902 上	240,273 8,055,880	7,692 264,284	247,965 8,320,164		33.6	254,160 8,569,009	97.6 97.1
1902 下	284,921 9,440,049	20,774 687,354	305,695 10,127,403	553,660 18,447,567	33.1	338,283 11,332,513	90.4 89.4
1903 上	372,207 12,363,593	29,241 1,037,000	401,448 13,400,593		33.4	416,067 13,973,866	96.5 95.9
1903 下	465,615 15,974,773	23,984 854,427	489,599 16,829,200	891,047 30,229,793	34.4	505,541 17,444,747	96.8 96.5
1904 上	311,619 11,510,380	36,496 1,445,398	348,115 12,955,778		37.2	363,585 13,608,078	95.7 95.2
1904 下	333,860 12,634,833	31,753 1,253,122	365,613 13,887,955	713,728 26,843,733	38.0	408,339 15,660,377	89.5 88.7
1905 上	368,762 14,716,470	10,940 452,216	379,702 15,168,686		39.9	416,239 16,785,863	91.2 90.4
1905 下	329,236 13,977,443	11,214 486,353	340,450 14,463,796	720,152 29,632,482	42.5	385,912 16,460,599	88.2 87.9
1906 上	343,062 14,995,204	7,296 330,745	350,358 15,325,949		43.7	374,460 16,406,747	93.6 93.4
1906 下	386,595 17,051,903	11,464 503,022	398,059 17,554,925	748,417 32,880,874	44.1	427,584 18,896,779	93.1 92.9
1907 上	359,984 15,927,358	15,696 720,308	375,680 16,647,666		44.3	416,681 18,558,510	90.2 89.7
1907 下	212,621 9,496,072	7,791 363,943	220,412 9,860,015	596,092 26,507,681	44.7	262,745 11,788,209	83.9 83.6
1908 上	256,481 10,661,343	11,733 571,620	268,214 11,232,963		41.9	304,049 12,823,466	88.2 87.6
1908 下	146,320 5,699,365	7,800 383,570	154,120 6,082,935	422,334 17,315,898	39.5	199,481 7,900,438	77.3 77.0
1909 上	341,375 13,545,978	4,756 221,312	346,131 13,767,290		39.8	374,798 14,859,611	92.4 92.6
1909 下	366,931 15,352,332	5,411 288,052	372,342 15,640,384	718,473 29,407,674	42.0	401,835 16,797,159	92.7 93.1
1910 上	493,820 21,380,699	14,791 753,106	508,611 22,133,805		43.5	542,798 23,598,717	93.7 93.8
1910 下	410,785 18,843,550	39,067 1,895,553	449,852 20,739,103	958,463 42,872,908	46.1	500,107 23,097,794	90.0 89.8
1911 上	365,916 18,395,551	14,610 858,641	380,526 19,254,192		50.6	432,222 21,829,580	88.0 88.2
1911 下	337,067 17,027,013	24,144 1,289,949	361,211 18,316,962	741,737 37,571,154	50.7	422,805 21,408,245	85.4 85.6
1912 上	373,095 18,917,144	35,944 1,885,104	409,039 20,802,248		50.9	471,410 23,930,428	86.8 86.9
1912 下	539,503 26,840,804	51,329 2,662,832	590,832 29,503,636	999,871 50,305,884	49.9	653,387 32,704,274	90.4 90.2
1913 上	601,916 30,505,586	42,023 2,380,679	643,939 32,886,265		51.1	709,116 36,249,502	90.8 90.7
1913 下	565,975 29,590,248	60,070 3,366,018	626,045 32,956,266	1,269,984 65,842,531	52.6	697,100 36,840,175	89.8 89.5
1914 上	744,108 37,913,385	85,768 4,347,836	829,876 42,261,221		50.9	907,025 46,308,901	91.5 91.3
1914 下	621,263 26,645,545	112,605 4,819,687	733,868 31,465,232	1,563,744 73,726,453	42.9	802,945 34,542,245	91.4 91.1
1915 上	591,926 23,188,201	120,335 4,778,085	712,261 27,966,286		39.3	783,731 30,757,045	90.9 90.9
1915 下	799,836 32,315,013	75,388 3,186,334	875,224 35,501,347	1,587,485 63,467,633	40.6	943,945 38,247,404	92.7 92.8
1916 上	720,831 32,119,089	76,893 3,681,978	797,724 35,801,067		44.9	881,909 39,884,744	90.5 89.8
1916 下	599,643 31,723,400	74,251 3,960,117	673,894 35,683,517	1,471,618 71,484,584	53.0	759,535 41,021,751	88.7 87.0
1917 上	582,571 39,088,277	116,575 7,624,586	699,146 46,712,863		66.8	784,384 52,592,748	89.1 88.8
1917 下	487,156 46,713,054	58,641 5,789,304	545,797 52,502,358	1,244,943 99,215,221	96.2	628,175 61,189,224	86.9 85.8
1918 上	378,588 43,846,549	118,422 13,992,783	497,010 57,839,332		116.4	636,672 76,083,755	78.1 76.0
1918 下	316,479 42,518,954	69,372 9,480,318	385,851 51,999,272	882,861 109,838,604	134.8	627,866 86,706,004	61.5 60.0
1919 上	309,813 45,400,961	68,362 9,801,494	378,175 55,202,455		146.0	451,835 65,401,196	83.7 84.4
1919 下	158,970 38,718,113	38,553 8,725,569	197,523 47,443,682	575,698 102,646,137	240.2	239,176 56,235,731	82.6 84.4
1920 上	173,050 43,878,248	42,990 11,125,863	216,040 55,004,111		254.6	291,312 74,095,072	74.2 74.2
1920 下	327,082 37,182,701	132,056 17,811,327	459,138 54,994,028	675,178 109,998,139	119.8	623,462 80,886,733	73.6 68.0

資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』
備考）小數點以下は四捨五入。

されねばならない。日本紡績業は，その成長期に遭遇した二回の深刻な恐慌を中國市場への輸出ドライブを強化することによって乗り切ったのである。

1910年代は，日清戰爭以降十數年にわたって蓄積されてきた日本紡績業の對中國輸出に依存する體質が，第一次世界大戰をはさむ前半と後半でその質を完全に轉換させた十年であった。一言で表現するならば，前半は量的擴大と後半の質的向上への助走の5年であり，後半は前半の助走をうけた質的向上と量的縮小の5年であった。以下の各章において，その様相を詳細に檢討していく。

2，1910年代前半の中國市場

1910年代前半は，日本綿糸の對中國輸出が數量の上で飛躍的に擴大した期間であった。香港を含む對中國輸出は，圖表－3のように1908年に一旦42萬2千擔にまで落ち込むが，その後日露戰爭後恐慌を乗り切るために實施された輸出奬勵策の效果などもあって，1909年以降增加に轉じ，辛亥革命の年，1911年に一旦74萬2千擔に落ち込んだのを唯一の例外として，1910年95萬8千擔，12年100萬擔，13年127萬擔，14年156萬4千擔と增加の一途をたどり，そして15年には158萬7千擔のピークに達した。1914年には中國市場において日本綿糸はインド綿糸を拔き去り，首位の座を獲得した。さらに翌15年下半年には對中國輸出が日本綿糸の輸出全體に占める割合は92.7%に達し，1910年上半年以來の最高を記錄した。まさしく中國の太糸市場は日本紡績業にとって必要缺くべからざる存在になったのである。

このような著しい量的擴大の一方で，次の時代の大きな變化を準備する胎動が進んでいたことにも目を配る必要がある。それは從來，16番手を中心とする20番手以下の太糸市場であった中國に，わずかながらではあるが，20番手超過の細糸市場が形成されはじめ，おもに日本綿糸がその供給を擔いつつあったことである。「細糸輸出の好望」という見出しの1913年2月13日付け『大阪每日新聞』の記事は，その狀況を次のように傳えている。

> 昨年中〔1912年〕に於る綿糸二十一番手以上の輸出高は三萬六千五百二十一梱一ヶ月平均三千四十四梱なるが之を〔明治〕四十年〔1907年〕四十一年〔1908年〕に於ける平均七百梱に比すれば約四倍の增加にて逐年增加の趨勢ある…… 二十番手以上の中細糸が斯くの如き順調の發達を告げたるものは素より輸出筋の努力によること大なるは言ふを待たざれど一面に於いて本邦綿糸の大需要地たる支那の機業漸次改良せらるゝと同時に善良なる中細糸の如きを製織するの設備技術の發達を伴ひたるは言ふまでもなくやがて上中流社會の嗜好に適し次第に需要を惹起せる結

果に外ならず[5)]。

すでに拙著で指摘したことがあるように，従來中國市場を獨占していた10－20番手の太糸は，明清以來農村の家内手工業として營まれてきた在來織布業において，小幅厚地綿布である新土布の原料綿糸として消費されたのに對し，20番手超過の細糸は，足踏み織機あるいは力織機などを生産用具とする近代織布業において，廣幅薄地綿布である改良土布あるいは薄地機械製綿布の原料綿糸に用いられた。日本綿糸の大市場である中國に，従來の在來織布業に加え，新たに近代織布業の市場が形成されつつあることを傳えたうえで，記事はさらに以下のように分析する。

> 一面織機に於ても上海方面を第一とし廣東天津方面の機業地に於ては手機に更ふるに力織機を以てし着々改良を見るに至れるは前途本邦中細糸の需要に對して少なからざる好影響を與ふべし尤も本邦と雖も未だ太糸時代を脱せざる際なれば支那の太糸時代を脱する事は實は前途遼遠にして織機の改良も亦此方面に於て需要を多からしむるは論なきも元來支那棉花が其性質上二十手以上の中細糸を製出するに適せざることの事情よりするも本邦中細糸の輸出は前途益々有望なるべしと[6)]。

中國における工業化の最先進地である上海に加え，廣東，天津においても近代的織布業が萌芽しているにもかかわらず，纖維が太くて短い舊大陸綿の系統に屬する中國綿花を原料綿花とする限り，20番手超過の細糸を生産することが難しい中國の現狀からいえば，日本綿糸の對中國向け細糸輸出は大いに將來性があるというのである。同じ頃，『大阪新報』は日紡の今井支配人の談話として，次のような記事を掲載した。

> 在來の太糸紡績業が支那市場に地盤を有するに至りて大發展をなしたる如く我が細糸紡績も單に内需に滿足せず須らく之れが販路を求めざる可らず……之れを支那に就て見るも現今我が四十二手の頗る好評なるあり支那繻子に用いらるゝ南清方面の需要を始め飾紐の如き漸次用途の擴大を見つゝありて更に天津方面など甚だ有望なるあり[7)]。

5）「細糸輸出の好望」――『大阪毎日新聞』1913年2月13日
6）同上
7）「細糸紡績の有望 ―― 今井日紡支配人談」――『大阪新報』1913年2月25日

日本紡績業にとって，太糸に續いて細糸においても，中國市場が發展の要であるという認識は，すでに業界の共通認識となっていたのである。とくに清朝末期の北洋實業新政で中心的な位置を占めていた天津一帶の近代織布業に大きな期待が寄せられていたことは注目に値する。また當時，1911 年における內外綿の上海進出で日本國內紡績業の空洞化が懸念されていたなかで，ある論說記事は「本邦〔日本〕の紡績業者は支那輸出に於ける太糸方面よりも一層中細糸の方面に發展するの得策なるや知るべからず」[8] と，輸出綿糸の高番手化という製品の高附加價値化によって產業の空洞化をくいとめるべきであるとの見解を示していた。

日本綿糸の對外輸出が太糸から細糸へ轉換する兆候は，すでに 1910 年代前半における輸出綿糸の平均番手の變遷に明確に見て取ることができる。圖表－ 4 のように，日本輸出綿糸の平均番手は，1909 年まで 16 番手から 17 番手までわずか 1 番手の狹いレンジのなかで行きつ戻りつしていた。10，12 番手の太糸を得意とするインド綿糸に對して，後發の不利を克服するために 16 番手を主力として中國市場に參入した日本綿糸の特質を正確に反映したデータである。それが 1910 年になると，一擧に 17.6 番手に上昇し，第一次世界大戰の前年 1913 年には，筆者が在來セクターと近代セクターの境界線と措定している 20 番手の線を超え，15 年には 20.5 番手まで上昇した。5 年をかけて 2.9 番手の上昇であるから，1910 年代後半の急激な上昇と比較すれば，緩やかな上昇と判斷せざるをえないが，

圖表－ 4　1903－20 年日本國內生產と輸出綿糸の平均番手比較

資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

8）「邦人の支那紡績經營」――『大阪每日新聞』1913 年 7 月 5 日

1909年までの停滞状況，さらに1903年から1920年まで22番手を挾んで2番手ほどのレンジに張り付いていた日本國內生產の平均番手と比べるならば，1910年代前半の上昇は龜の歩みながら，在來セクターから近代セクターへの轉換を確實に進め，1910年代後半における兎の跳躍ともいうべき急激な高番手化への助走過程に相當する5年であったと考えられる。

3，1910年代後半の中國市場

1910年代後半の中國市場を方向付ける決定的要因は，第一次世界大戰がもたらした東アジア綿工業製品流通の構造的變化であった。第一次世界大戰勃發前年の1913年において中國に輸入される生地綿布（本色棉布）は，イギリス1,170萬5千疋，アメリカ228萬1千疋，日本571萬7千疋，その他を合わせて總計1,979萬5千疋であったが，大戰が深刻化するにつれて歐米からの輸入は激減し，大戰末期の1918年には，イギリス263萬4千疋，アメリカ10萬1千疋，日本700萬7千疋，その他を合わせて總計1,042萬1千疋となった。この5年間で，イギリスは4分の1以下，アメリカは22分の1以下に減少した結果，日本が129萬疋增加したにもかかわらず，總計は937萬4千疋も減少して，半分近くに急減した。とくに高級薄地綿布の割合が大きいイギリス綿布が807萬1千疋も減少したことは，中國の市場構造に激變をもたらすことになった。

さらに追い討ちをかけたのは，第一次世界大戰の間隙に乘じて日本が中國につきつけた「對華二十一カ條要求」に反對する日貨ボイコット運動の盛り上がりであった。再び生地綿布の中國への輸入について見ると，1913年にイギリスの半分程度であった日本は，大戰勃發の14年には200萬疋近く急增して，772萬8千疋となり，1,047萬3千疋に減少したイギリスのほぼ4分の3にまで迫ったのであるが，1915年に入ると，3－7月の半年近くにわたって續いた二十一カ條要求反對の日貨ボイコット運動の影響で，1913年から14年への急增分をまるまる失い，13年とまったく同じ571萬7千疋にまで急減した。このような狀況は，中華民國時期に入って日本綿布の輸出が急增していた天津地區でもほぼ同じであった。1915年6月23日付け『時事新報』は，次のように傳えている。

> 天津を中心に本邦輸出織布の發展は大正元年度〔1912年〕四萬九千六百九十三俵なりしもの同二年度〔1913年〕は一躍八萬九千七百七十八俵に達し更に同三年度〔1914年〕には十一萬千六百八十一俵と纍進的に急增を示せり右は歐州戰亂に伴ふ英獨棉布輸入漸減に基くべきも亦一面蒙古方面に移出せらるゝもの漸增せるが爲なるに本年一月以來の統計は輸出金額數量共に昨年の同時に比し減少の事實を示し殊に三月に

入りては昨年同期に比較し綾木綿に於て約三割方の減少を示し粗布に於て二割方の増加あり差引一割方の減少に止まりしが四月に入りては約二割方激減し更に五月に入りては生產額は一割乃至一割五分方激增したるにも拘らず輸出は却って一割方減少すると共に天津市場に於ける停滯織布約二萬俵と傳えられ阪神各倉庫に於ける綿布約一萬俵各紡績會社の工場倉庫に在るもの約二萬俵に達し市價は逐日新安値に落ち込み……是は生產過剩に因り一部會社の投賣り輸出を試みたる結果にも依るならんが要するに排日貨熱の影響を蒙り賣行き不況の結果に外ならず[9]。

第一次世界大戰勃發にともなうヨーロッパ綿布の輸入減少と奥地後背地での需要急增とにより，1912年以來の倍倍ゲームに近い增加が見込まれていた1915年ではあるが，日貨ボイコット運動が本格化した3月には，日本輸出綿布の主力であった綾木綿が3割の激減に見舞われて，期待が潰えたばかりでなく，5月を迎えると，天津と日本國內の流通・生產兩段階における在庫急增と生產過剩との相乘效果で，日本綿布の相場は連日最安値を更新したというのである。しかし一方では，1915年は日本圓の上海宛外國爲替相場が100圓當たり87.82兩と，銀が史上最安値をつけた年でもあった。『時事新報』の記事は冒頭で，二十一カ條反對の日貨ボイコット運動が，辰丸事件の際のボイコットなど從來の運動とは異質の傾向をはらんでいることを指摘したうえで，第一次世界大戰にともなう銀塊相場の下落がボイコットの浸透をより助長した側面を記述している。

今回の排貨の原因は先年辰丸事件當時の排貨とは全然異なれり卽ち今回の排貨が日支外交問題に對する反感に伴ふ報復手段の一なるは云ふまでもなしと雖も又革命戰以來一般財界の不振に加へて今回の世界的大戰亂の影響を被り經財界は一時恐慌狀態に陷らんとし支那が唯一の生命として且つ財界のバロメーターを以て目せらるゝ農產物の對歐輸出貿易に於て一大頓挫を來し倫敦銀塊相場の漸落は輸入品價格の騰貴を促し延いて金融逼迫して一般販買力は著しく減殺せられ居る事情より見れば對支貿易の不振は當然免る可からざる成行なりと云はざるべからず[10]。

このように銀安による輸入品價格の高騰が外國製品の輸入を抑制してボイコットの效果を高めた側面も輕視はできないが，より重要な側面は，外國製品の價格騰貴とボイコッ

9）「排日貨と綿絲布（中）」――『時事新報』1915年6月23日
10）「排日貨と綿絲布（上）」――『時事新報』1915年6月22日

ト運動の「國貨提唱」が中國國内における輸入代替品の生産を促したことである。翌1916年からは，歐米における戰時インフレが進行して銀價格も上昇し，1915年に100圓當たり87.82兩の史上最安値をつけた銀は，翌年以降一轉して急騰し，1919年には100圓當たり38.85兩と15年の倍以上に高騰し，半世紀前の水準にまで戻した。しかしながら歐米における戰時インフレは銀の騰貴を50％程度上回るペースで進んだ結果，輸入品の銀建て價格も同じ程度の高騰をみた。

外國綿工業製品の輸入量が半減した上に，銀高にもかかわらず銀建て價格が急騰したことで，中國國内における輸入綿工業製品の代替品生産はまさに有卦にいった感があった。例えば清朝末期の北洋實業新政の中心であった天津地區では，輸入廣幅薄地機械製綿布の代替品である改良土布（日貨ボイコット運動では「愛國布」と稱せられた）の生産が隆盛に向かった。なかでも有名な高陽における輸入代替織布業の勃興について，1918年5月の調査は「歐州戰亂突發以來外國綿布の價格昇騰は益々高陽布の需要を增大し茲三四年閒の進步發達の程度著しきものと云うべし」[11] と述べている。しかも「其製織する織布は外國品の模造を主とし，極めて精巧なるものを製織す。高陽布として廣く知らるる所なり」[12] との記述もある。高陽近代織布業の勃興は，第一次世界大戰で流入が途絶して價格が高騰した金巾（市布）など輸入廣幅薄地機械製綿布の代替品生産を梃子とするものであった。

高陽における精巧な輸入代替品への生産シフトは，必然的に原料綿糸の高番手化をともなった。改良土布（愛國布）の生産に轉換した高陽では，「其消費綿糸の如きも十手十六手二十手等より進んで三十二手四十二手に入り更に六十手，八十手等のシルケットを混用してきわめて精巧なるものを織出するに至れり」[13] という狀況で，原料綿糸の高番手化が急速に進んでいたことを窺わせるものである。

中國國内における金巾など輸入廣幅薄地機械製綿布の代替品生産がもたらした原料綿糸の高番手化に卽應して，42番手を中心とする細糸を供給できたのは，當面のところ日本紡績業だけであった。

圖表－5に見られるように，日本42番手單糸の對外輸出は1912年上半年から始まっていたが，2萬梱の大台を超えたのは，1915年上半年のことであり，さらに改良土布（愛國布）の原料綿糸として需要の多い42番手撚糸へのシフトが始まったのが，1916年下半年で，その輸出高がピークの3萬1千梱余りに達したのが，1918年上半年であった。以上のような時系列の變化は，日本綿糸の對中國向け輸出の高番手化が，第一次世界大戰の進行

11）石田秀二『天津棉糸布事情』非賣品，18頁
12）「直隸省の織布業」――『大日本紡績聯合會月報』291號，1916年11月25日
13）同上

圖表－5　1903－1920年日本紡績工場

年＼番手	8	10	12	13	14	16	18	20	20×2	24	30	30×2
1903 上												
1903 下		582.0 5,820.0	645.0 7,740.0		8,466.0 118,524.0	129,222.0 2,067,552.0		20,991.0 419,820.0			25.0 750.0	
1904 上	5.0 40.0	267.5 2,675.0	106.0 1,272.0		2,553.5 35,749.0	70,649.0 1,130,384.0		24,823.0 496,460.0	338.0 6,760.0	2.0 48.0	25.0 750.0	
1904 下		2,136.5 21,365.0			1,949.5 27,293.0	89,664.5 1,434,632.0		17,532.0 350,640.0	1,102.0 22,040.0		5.0 150.0	
1905 上		5,949.5 59,495.0	148.0 1,776.0		1,583.0 22,162.0	106,337.5 1,701,400.0		23,887.5 477,750.0	1,278.0 25,560.0		253.0 7,590.0	
1905 下		6,701.5 67,015.0			2,325.0 32,550.0	86,495.0 1,383,920.0		19,173.0 383,460.0	1,673.5 33,470.0			
1906 上		2,348.0 23,480.0			1,823.0 25,522.0	90,272.5 1,444,360.0		20,902.5 418,050.0	1,063.0 21,260.0		268.0 8,040.0	
1906 下		3,572.5 35,725.0			225.0 3,150.0	93,495.5 1,495,928.0		16,467.5 329,350.0	229.0 4,580.0			
1907 上		3,319.5 33,195.0			1,810.0 25,340.0	98,628.5 1,578,056.0		18,979.5 379,590.0	788.5 15,770.0			
1907 下		3,781.0 37,810.0			1,215.0 17,010.0	74,566.0 1,193,056.0		15,449.0 308,980.0	1,025.0 20,500.0			
1908 上		3,089.0 30,890.0				58,125.5 930,008.0		20,431.5 408,630.0	1,160.0 23,200.0			
1908 下		3,745.0 37,450.0			161.5 2,261.0	43,115.0 689,840.0		7,683.5 153,670.0				
1909 上		3,273.5 32,735.0	38.0 456.0		267.0 3,738.0	81,995.0 1,311,920.0		26,007.0 520,140.0				
1909 下	8.0 64.0	1,483.5 14,835.0	768.5 9,222.0		1,001.0 14,014.0	90,820.5 1,453,128.0	39.0 702.0	27,155.0 543,100.0				
1910 上		3,256.5 32,565.0	640.5 7,686.0		2,682.0 37,548.0	119,501.0 1,912,016.0	116.0 2,088.0	38,632.5 772,650.0	1,005.5 20,110.0			
1910 下		6,449.5 64,495.0	632.0 7,584.0			91,419.0 1,462,704.0		45,128.0 902,560.0			697.0 20,910.0	401.0 12,030.0
1911 上		5,836.5 58,365.0				83,708.0 1,339,328.0		36,897.0 737,940.0	911.0 18,220.0		684.5 20,535.0	
1911 下		7,063.5 70,635.0				72,791.0 1,164,656.0		46,003.0 920,060.0	1,158.0 23,160.0		1,234.0 37,020.0	
1912 上			9,806.5 117,678.0			92,884.0 1,486,144.0		43,137.5 862,750.0				
1912 下		7,036.0 70,360.0	603.0 7,236.0	137.5 1,787.5	2,098.5 29,379.0	121,926.5 1,950,824.0		61,372.0 1,227,440.0			12,785.5 383,565.0	
1913 上		5,927.5 59,275.0	648.5 7,782.0	3.0 39.0	2,360.5 33,047.0	128,688.5 2,059,016.0		59,933.5 1,198,670.0			19,606.5 588,195.0	
1913 下			6,738.5 80,862.0			124,758.0 1,996,128.0		68,655.0 1,373,100.0				
1914 上			14,487.5 173,850.0			154,523.0 2,472,368.0		93,873.5 1,877,470.0				
1914 下			20,646.0 247,752.0			120,537.0 1,928,592.0		86,885.5 1,737,710.0				
1915 上			27,868.0 334,416.0			123,786.5 1,980,584.0		72,490.5 1,449,810.0				
1915 下			26,347.5 316,170.0			149,966.0 2,399,456.0		84,108.5 1,682,170.0				
1916 上			15,109.0 181,308.0			152,298.0 2,436,768.0		77,617.0 1,552,340.0				
1916 下			11,301.0 135,612.0			128,205.0 2,051,280.0		67,625.5 1,352,510.0			649.0 19,470.0	
1917 上			19,491.0 233,892.0			115,752.0 1,852,032.0		73,081.0 1,461,620.0			553.5 16,605.0	
1917 下			16,377.0 196,524.0			85,742.0 1,371,872.0		65,371.5 1,307,430.0			430.5 12,915.0	
1918 上			9,433.0 113,196.0			76,131.5 1,218,104.0		60,818.5 1,216,370.0			2,242.0 67,260.0	
1918 下			10,420.5 125,046.0			47,918.0 766,688.0		78,578.0 1,571,560.0			3,865.5 115,965.0	
1919 上			13,879.5 166,554.0			32,756.0 524,096.0		56,230.5 1,124,610.0			1,750.5 52,515.0	
1919 下			4,166.5 49,998.0			12,531.0 200,496.0		28,930.0 578,600.0			652.0 19,560.0	
1920 上			4,293.0 51,516.0			12,314.0 197,024.0		27,375.0 547,500.0			2,678.5 80,355.0	
1920 下			51,053.0 612,636.0			38,108.5 609,736.0		64,279.0 1,285,580.0			5,459.0 163,770.0	

資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』
備考）番手欄の「○×2」は，撚糸の意味である。

輸出用綿糸の番手構成と平均番手

單位＝（上段）梱・（下段）梱×番手

32	32 × 2	34	40	42	42 × 2	60	80	100	total	平均番手	日本國内
											リング
3,043.0 97,376.0		200.0 6,800.0	152.0 6,080.0						163,326.0 2,730,462.0	16.7	21.8
380.0 12,160.0	1,669.0 53,408.0	329.0 11,186.0	248.0 9,920.0		7.0 294.0				101,402.0 1,761,106.0	17.4	21.1
1,717.0 54,944.0	2,339.0 74,848.0	266.0 9,044.0	85.0 3,400.0		5.0 210.0				116,801.5 1,998,566.0	17.1	21.1
2,063.0 66,016.0	2,208.0 70,656.0	494.0 16,796.0	344.0 13,760.0		12.0 504.0				144,557.5 2,463,465.0	17.0	20.7
948.0 30,336.0	1,889.0 60,448.0	143.0 4,862.0	53.0 2,120.0		20.0 840.0				119,421.0 1,999,021.0	16.7	20.8
1,722.0 55,104.0	412.0 13,184.0	65.0 2,210.0	75.0 3,000.0		20.0 840.0				118,971.0 2,015,050.0	16.9	21.0
450.0 14,400.0	100.0 3,200.0								114,539.5 1,886,333.0	16.5	21.1
1,632.0 52,224.0	169.0 5,408.0								125,327.0 2,089,583.0	16.7	20.6
171.0 5,472.0									96,207.0 1,582,828.0	16.5	21.0
573.0 18,336.0	62.5 2,000.0		23.0 920.0						83,464.5 1,413,984.0	16.9	20.6
	125.0 4,000.0								54,830.0 887,221.0	16.2	20.4
	60.5 1,936.0								111,641.0 1,870,925.0	16.8	21.2
	244.5 7,824.0				21.0 882.0				121,541.0 2,043,771.0	16.8	21.3
									165,834.0 2,784,663.0	16.8	21.2
1,337.0 42,784.0	2,156.0 68,992.0					169.0 10,140.0	426.0 34,080.0		148,814.5 2,626,279.0	17.6	21.6
5,445.0 174,240.0	2,009.5 64,304.0				1,798.0 75,516.0	1,115.0 66,900.0	712.5 57,000.0		139,117.0 2,612,348.0	18.8	22.7
7,791.5 249,328.0	2,012.5 64,400.0				2,175.5 91,371.0	733.0 43,980.0	575.0 46,000.0		141,537.0 2,710,610.0	19.2	22.8
5,973.5 191,152.0				4,412.0 185,304.0		1,125.0 67,500.0	317.5 25,400.0		157,656.0 2,935,928.0	18.6	23.4
				7,022.5 294,945.0		1,231.5 73,890.0		378.0 37,800.0	214,591.0 4,077,226.5	19.0	23.0
				10,519.0 441,798.0		1,632.5 97,950.0		850.5 85,050.0	230,170.0 4,570,822.0	19.9	23.0
11,667.0 373,344.0				15,352.0 644,784.0		2,677.0 160,620.0			229,847.5 4,628,838.0	20.1	21.5
13,551.0 433,632.0				16,900.0 709,800.0		2,614.5 156,870.0			295,949.5 5,823,990.0	19.7	21.3
13,085.0 418,720.0				18,612.5 781,725.0		2,041.5 122,490.0			261,807.5 5,236,989.0	20.0	21.0
12,747.0 407,904.0				21,710.5 911,841.0		2,249.0 134,940.0			260,851.5 5,219,495.0	20.0	22.1
16,261.0 520,352.0				30,346.0 1,274,532.0		2,477.5 148,650.0			309,506.5 6,341,330.0	20.5	21.7
12,479.0 399,328.0				28,941.5 1,215,543.0		3,443.5 206,610.0			289,888.0 5,991,897.0	20.7	21.6
3,932.0 125,824.0	4,773.5 152,752.0		4,190.5 167,620.0	536.5 22,533.0	27,252.0 1,144,584.0	4,413.0 264,780.0			252,878.0 5,436,965.0	21.5	21.1
5,556.5 177,808.0	6,358.0 203,456.0		3,812.0 152,480.0	841.0 35,322.0	28,011.5 1,176,483.0	3,038.0 182,280.0			256,494.5 5,491,978.0	21.4	21.3
3,819.0 122,208.0	4,373.5 139,952.0		1,589.5 63,580.0	1,021.5 42,903.0	29,596.5 1,243,053.0	3,299.5 197,970.0			211,620.5 4,698,407.0	22.2	21.5
7,604.0 243,328.0	6,391.5 204,528.0		6,362.5 254,500.0	835.5 35,091.0	31,163.5 1,308,867.0	4,215.5 252,930.0			205,197.5 4,914,174.0	23.9	22.7
15,029.0 480,928.0	3,219.0 103,008.0		12,910.5 516,420.0	1,153.0 48,426.0	23,514.0 987,588.0	5,205.0 312,300.0			201,812.5 5,027,929.0	24.9	22.9
14,377.5 460,080.0	4,397.5 140,720.0		3,656.5 146,260.0	1,014.5 42,609.0	19,466.5 817,593.0	3,572.0 214,320.0			151,101.0 3,689,357.0	24.4	21.5
5,364.5 171,664.0	3,793.5 121,392.0		1,087.5 43,500.0	191.0 8,022.0	20,251.5 850,563.0	1,689.5 101,370.0			78,657.0 2,145,165.0	27.3	21.3
10,335.5 330,736.0	2,833.0 90,656.0		5,777.0 231,080.0	530.5 22,281.0	20,076.0 843,192.0	4,844.5 290,670.0			91,057.0 2,685,010.0	29.5	22.7
8,971.5 287,088.0	2,481.5 79,408.0		11,439.0 457,560.0		11,748.5 493,437.0	3,837.0 230,220.0			197,377.0 4,219,435.0	21.4	21.5

にともなう廣幅薄地機械製綿布の輸入激減と價格高騰を追い風として中國國内において代替品生產が急增し，その原料綿糸として40番手前後の細糸に對する需要が一擧に高まった事情に因ることを如實に示している。

1910年代後半における日本輸出綿糸の平均番手は，圖表－5によって概觀すると，1913年下半年から15年上半年にかけて2年間，20番手の線に張り付いていたが，1915年下半年の20.5番手への上昇をきっかけに高番手化への彈みがつき，1918年下半年には24.9番手まで上昇し，さらに1919年下半年には27.3番手，20年上半年には29.5番手まで急上昇した。1919年下半年の急上昇は，五四運動の日貨ボイコット運動においても，「細手四十二番ノ如ク當地需要品トシテ日本品以外ニ求ムヘカラサルモノハ內密ニ引合アリ」[14] という事情があり，日本製綿布の代替品として愛國布の生產が增大するにつれ，40番手前後の細糸の輸入が增大した結果と推測される。1920年下半年は，一旦21.4番手まで急低下するが，この年3月2日にインドルピーが1スバレーン15ルピーから10ルピーへと大幅に切り上げられた結果，10，12番手の太糸を主力とするインド綿糸が完全に競爭力を失って輸出が途絕え，その穴を日本製の太糸が補ったことに因る現象であった。しかしこれは一時的な現象で，その後は日本輸出綿糸の高番手化は再び加速した[15]。

日本輸出綿糸の高番手化に反比例するように，1910年代後半における日本綿糸の對中國向け輸出高は急減した。圖表－4にもどって見ると，1915年に158萬7千擔でピークアウトした輸出高は，翌年以降幾何級數的に減少を續け，1919年には57萬6千擔にまで減少し，ピーク時のほぼ3分の1に低下した。1920年にはインドルピーの切り上げによる太糸輸出の急增で，一旦67萬5千擔に回復するが，その後は減少の一途をたどった。

以上のように1910年代後半は，日本綿糸の對中國向け輸出が，量的縮小を質的向上で補った時期であった。しかもそれは，第一次世界大戰の勃發とともに歐米各國からの機械製綿布の輸入激減と價格高騰に對處して，中國國内における輸入代替品生產が隆盛に向かった必然の結果であるとともに，第一次世界大戰が東アジアの綿工業製品流通にもたらした構造的變化をもっとも集中的に表現する現象であった。さらに日本輸出綿糸の高番手化は，日中經濟關係のより大規模な構造的變化を招來することになる。

14）『日本外交文書』大正八年第二册下卷，1374頁

15）拙著『中國近代綿業史の研究』京都大學學術出版會，2001年，322－324頁

4，商品輸出から資本輸出へ

1910年代後半における日本輸出綿糸の急速な高番手化は，日本紡績業の對中國戰略を商品輸出から資本輸出へと，より高度な段階に進ませる要因の一つになったと考えられる。日本の對中國資本輸出は，1895年4月に締結された下關條約第6條第4項の「製造權承認」を淵源とするものである。その直後，大阪地方を中心とする紡績會社と貿易商社が寄り合いで上海に東華紡織株式會社の設立を發起し，さらに三井財閥が同じく上海に上海紡績株式會社の設立を發起したが，いずれも挫折した[16]。その後1902年には，三井物產の一部出資によって上海紡績會社が設立され，1911年から13年にかけては綿花商社の內外綿會社が上海で第三工場，第四工場の操業を次々に開始し，さらに1918年には日本綿花，伊藤忠，富士瓦斯紡績など商社と紡績會社が共同出資して上海に日華紡織を設立した。これら「商社系」と稱される上海紡績，內外綿および「寄り合い系」と稱される日華紡織が在華紡の先驅けであったとすれば[17]，在華紡の本隊ともいうべき「紡績系」の進出は，第一次世界大戰期に蓄積した膨大な超過利潤を背景に，戰後の1920年代前半に集中したが，その動機となった要因は，1910年代に堆積されたものであった。

すでに第一次世界大戰勃發以前から，太糸の分野では日本輸出綿糸は中國への輸出競爭力を失い，いずれは中國へ生產據點をシフトせざるをえないという認識は定着していた。第一次世界大戰の導火線となったサラエボの銃聲が響いた日（1914年6月28日）の數日前，『大阪朝日新聞』に次のような論說が掲載された。

> 翻って考うるに由來紡績は太糸に始まり漸次細糸紡出に進むは世界紡績史の示す處にして本邦紡績も亦此辿り來り而も一昨年六十萬錘增設の結果此の大勢は益々促進せられたるものゝ如し現に本邦紡績會社中には創立後既に三十余年に達し其の古機械の處分に苦しみつゝあるものあり彼等は新設の精銳なる機械を以って中糸細糸を紡出し古機械を支那に移植して八手十手十二手等を紡出印度糸に對抗せば當に本邦紡績の利益を侵害せざるのみならず却つて利益を產出する一因となるべし[18]

太糸分野における輸出競爭力の低下は，第一次世界大戰期を通じてさらに顯著となっ

16）高村直助『近代日本綿業と中國』東京大學出版會，1982年，68－75頁
17）籠谷直人「日本綿業における在華紡の歴史的意義 —— 5・30事件から日中戰爭直前まで」—— 森時彥編『在華紡と中國社會』京都大學學術出版會，2005年，7頁
18）「紡績の支那發展時機（三）」——『大阪朝日新聞』1914年6月25日

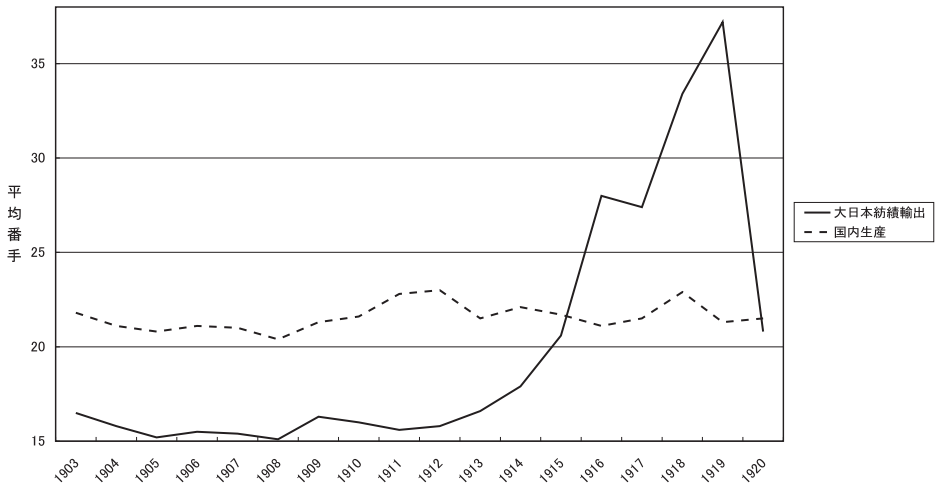
た。その要因としては，日本國內賃金コストの 2 倍にのぼる上昇，中國輸入關稅の實質 5 %への引き上げ，さらに日本紡績業躍進の原動力であった深夜業の近い將來における禁止の可能性などが擧げられる。これらの要因が重なって，日本綿糸は，1910 年代後半において太糸の分野では輸出競爭力を完全に失い，高附加價値の細糸に輸出をシフトせざるを得ない狀況に追い込まれたのである。その當然の結果として，圖表－ 5 のように 1910 年代後半において日本輸出綿糸の平均番手は，20 番手から 29.5 番手に急上昇することになったのである。さらにその延長線上には，對中國輸出は高附加價値の細糸に特化して，輸出競爭力を喪失した太糸については生產據點を中國にシフトするという選擇があったのである。

「紡績系」の中核ともいうべき日本三大紡の對中國進出は，1921 年開業の大日本紡績（現地名，大康），22 年開業の上海製造絹糸（現地名，公大），そして 23 年開業の東洋紡績（現地名，裕豐）と 3 年連續の目白押しであった。1918 年に尼崎紡績が攝津紡績を吸收合併して設立された大日本紡績は，翌 19 年に靑島に敷地を得て，21 年に操業開始にこぎつけ，さらに上海でも 20 年に敷地を得て，22 年に操業を開始した。靑島工場の紡錘機は，一部大日本紡績野田工場および攝津工場の中古太糸紡錘機を移設したもので，第一次世界大戰勃發直前の『大阪朝日新聞』論說の主張がそのまま實現した感がある。鐘淵紡績は最初中國進出に批判的であったが，19 年に方針轉換し，22 年に現地子會社の上海製造絹糸が操業を開始した。さらに 1914 年に大阪紡績と三重紡績が合併して設立された東洋紡績は，1921 年に上海工場の建設を計畫し，23 年に操業開始にこぎつけた[19]。

1910 年代におけるこれら三社の輸出用綿糸が，どのような番手構成で，どの程度の平均番手であったかを分析すれば，三社が中國進出を決意するに至った背景を窺うことができる。圖表－ 6 は，1918 年に合併する以前の尼崎紡績と攝津紡績についても，兩社のデータを合計して，合併後の大日本紡績と斷絕のないように調整したうえで，その輸出用綿糸の平均番手（實線）と日本國內生產の平均番手（破線）を比較したものである。容易に見てとれるように，兩社の輸出用綿糸の平均番手は 1914 年の第一次世界大戰勃發まで，16 番手綿糸に特化して對中國輸出を急擴大した日本綿糸の典型というにふさわしく，10 年以上の閒 16 番手前後で推移していた。それが第一次世界大戰勃發以降，急激な高番手化が進み，1915 年下半年には 20 番手を超え，1916 年上半年には 25.8 番手に跳ね上がって日本國內生產の平均番手を 4.2 番手も上回り，1920 年上半年には 39.2 番手にまで上昇した。さら

19）三大紡の形成過程と中國進出の經緯については，桑原哲也『企業國際化の史的分析』森山書店，1990 年が詳しい。

圖表－6　1903－20年日本國内生産と大日本紡績輸出綿糸の平均番手比較



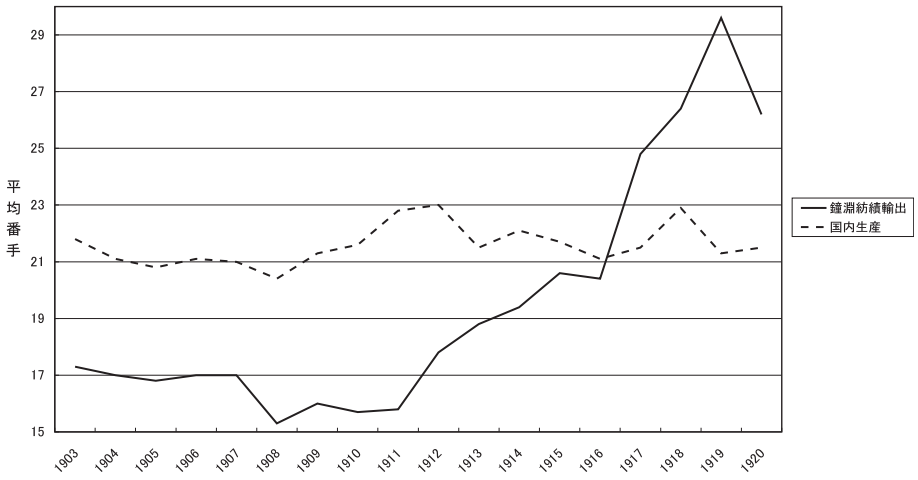
資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

に高番手化の内譯を列擧すると，まず42番手單糸が1915年下半年に7,500梱，16年上半年に9,400梱余りと急增した後，16年下半年からは42番手撚糸に移って7,500梱余り，その後も伸びつづけ18年上半年には12,500梱余りのピークを記錄した。一方かつての主力であった16番手は，1913年上半年に24,800梱でピークアウトした後，減少傾向にはいり，1917年下半年に9,500梱と1萬梱の大臺を割った後も齒止めがかからず，1920年上半年には423.5梱にまで低落した[20]。

鐘淵紡績についても，圖表－7のように若干のタイムラグはあるものの大日本紡績とほぼ同じプロセスを觀察することができる。鐘淵紡績の輸出用綿糸の平均番手は，やはり第一次世界大戰勃發までは17番手前後で推移していたが，1917年上半年に21.6番手で日本國内生産の平均番手をわずか0.3番手ではあるが上回った後，急速に高番手化が進み，1920年上半年には38.1番手に達した。番手構成では，1914年下半年にまず42番手單糸が4,200梱余りに乘せ，15年下半年に5,000梱に迫った後，16年下半年からは42番手撚糸に移り，17年下半年に5,300梱余りのピークに達する。一方16番手の方は，第一次世界大戰勃發前の1914年上半年に42,000梱余りでピークアウトした後，ほぼ一本調子に減少し，1919年下半年には724梱にまで低落した。

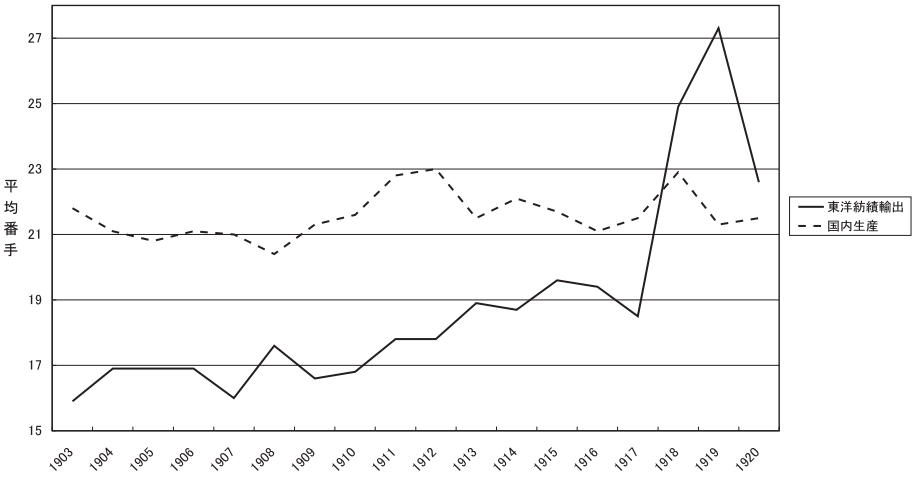
20）以上の數値は，圖表－5と同じマトリックスで作成した各企業の番手別構成のデータに基づいているが，データが膨大すぎるので本稿では割愛する。以下の4企業についても同じである。他日機會をみて公表したい。

圖表－7　1903－20年日本國內生產と鐘淵紡績輸出綿糸の平均番手比較



資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

圖表－8　1903－20年日本國內生產と東洋紡績輸出綿糸の平均番手比較



資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

さらに大阪紡績と三重紡績が合併した東洋紡積について見ると，圖表－8に鮮明なように，前二社と比較すると輸出用綿糸の高番手化は，タイムラグがあるうえに，やや緩慢である。東洋紡績の場合，輸出用綿糸の平均番手は第一次世界大戦中もほぼ18番手臺で推移し、大戦末期の1918年上半年にいたって，ようやく23.2番手に上昇して，日本國內生產の平均番手を0.5番手上回ったが，その後も高番手化のスピードは緩慢で，1919年下半年

に 27.3 番手のピークを付けた。番手構成でも，42 番手單糸は 1915 年下半年の 4,800 梱余り，42 番手撚糸は 16 年下半年の 3,500 梱足らずがピークであった。一方 16 番手の方は，ピークが 16 年下半年にずれ込んで 17,700 梱足らずであったが，その後の減少は急速で，19 年下半年に 923.5 梱のボトムを記録した。

以上三社の，1910 年代とりわけ 1910 年代後半における輸出用綿糸の番手構成と平均番手の變遷を辿ると，大戰中の 1916 年 10 月から 11 月にかけて中國紡績業の事情を視察した富士瓦斯紡績社長和田豐治が，輸出日本綿糸の強敵は在華紡綿糸であり，とりわけ内外綿の「水月」が「最も強敵」であると指摘したうえで，「若し夫れ經營上の問題としては，常に彼此の經營を共通ならしめ，作業の上に於ては分業を本位とし，我國〔日本〕より彼國〔中國〕に輸入すべき紡績糸は細手，中手を以てし，太手は彼國に於て製造するを可なりとす，太糸工場を支那に興すべしとは予の豫ての持論なりしが，今回の視察に於て愈々其緊要にして得策なるを確め得たる次第」[21] と力說した主張を實施に移した感がつよい[22]。

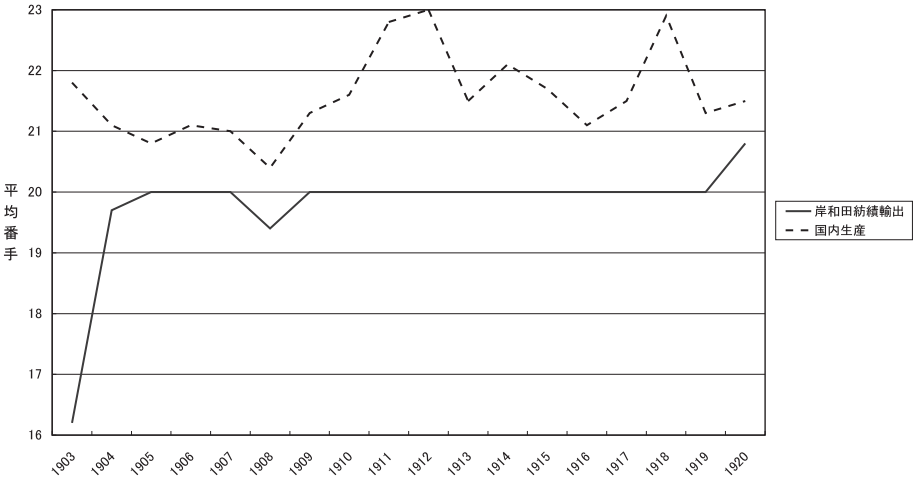
しかも三社の輸出用綿糸の平均番手が日本國内生產の平均番手を超えた時期を比較すると，大日本紡績が 1916 年上半年，鐘淵紡績が 17 年上半年，そして東洋紡績が 18 年上半年で，ちょうど 1 年おきであることが分かる。さらに 25 番手の大台を超えた時期を比べると，大日本紡績が 1916 年上半年，鐘淵紡績が 18 年下半年，そして東洋紡績が 19 年上半年という順序になる。三社の輸出用綿糸が高番手化していく順序と間隔が，三社が中國へ工場を進出させた順序と間隔に結果として完全に一致するのは興味深い現象である。

これら三大紡を含めて日本十大紡のうち八社は，1920 年代前半に中國への工場進出を實行したが，岸和田紡績と倉敷紡績の二社だけは敷地を取得しながら進出を取りやめた。兩社が頓挫した原因については，岸和田紡績の場合は，社長寺田甚與茂の商人的保守施策が進出を逡巡させ，倉敷紡績の場合は，進出のタイミングが遅れたことが後發のリスクを過大に意識させたとの見解がある[23]。そのような背景を考慮しつつ，輸出用綿糸の高番手化という視點から見ると，兩社には三大紡と明確に異なる共通の傾向がある。

圖表－ 9 を見ると、1910 年代後半に輸出用綿糸の急激な高番手化を進めた三大紡とは異なり、岸和田紡績の輸出用綿糸は，日露戰爭以降十數年間，一貫して 20 番手綿糸に特化して推移し，1910 年代後半においても高番手化の氣配はまったくなかった。20 番手輸出高のピークは，1915 年下半年の 45,000 梱弱であるが，その後の減少もさほど急激ではなかった。

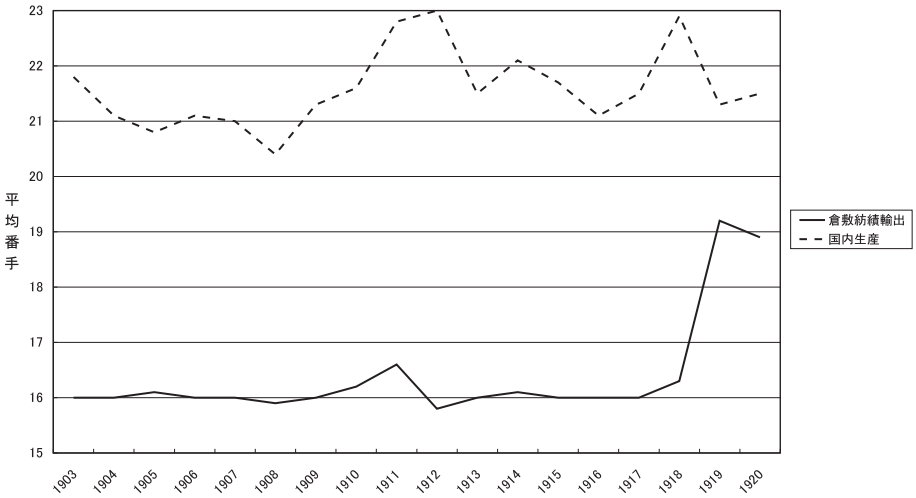
21）「支那紡績業視察」――『大日本紡績聯合會月報』294 號，1917 年 2 月 25 日
22）桑原哲也『企業國際化の史的分析』森山書店，1990 年，200－201 頁
23）同上，255－262 頁

圖表－9　1903－20年日本國內生產と岸和田紡績輸出綿糸の平均番手比較



資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

圖表－10　1903－20年日本國內生產と倉敷紡績輸出綿糸の平均番手比較



資料）各年次『綿絲紡績事情參考書』

一方倉敷紡績は，圖表－10のように，1903年以來あたかも日本綿糸の代表であるかのように，ほとんど16番手專門で第一次世界大戰終結の1918年後半年まで推移し，1919年以降いささかの高番手化は模索するものの，時すでに遲しの感は否めなかった。16番手綿糸の輸出高は1916年後半年の30,000梱余りがピークで，その後の減少は急激で1920年

上半年には 823.5 梱まで低下した。兩社に共通する傾向は，第一次世界大戦終了の時期まで 16 番手あるいは 20 番手に特化した輸出用綿糸の番手構成であったため，いずれの會社も國内と國外で細糸と太糸の分業を行う條件も必要もまったくなかったことである。

以上のように進出を決行した三大紡と進出を斷念した岸和田，倉敷兩社とのまったく異なる傾向を勘案すると，「紡績系」在華紡の對中國進出は，和田豐治の持論であった高附加價値の輸出用細糸は日本國内で生産し，低附加價値の太糸は中國の上海あるいは青島で現地生産するという東アジア規模の分業體制を實行に移したものにほかならないと言うことができる。しかもその必要十分條件は，第一次世界大戦期閒から以降にかけての 1910 年代後半に，大戦の進行がもたらした東アジア的な規模における綿工業製品の生産・流通をめぐる構造的再編によって整えられていたのである。

む す び

19 世紀末から 1920 年代にかけての時期は，中國の傳統社會が近代社會に變貌していく激動の過渡期であった。綿紡織業の分野でも，農村副業の家内手工業として舊式の織機（いざり機，高機など）で小幅厚地の土布を生産する在來織布業が全盛で，その原糸となる 10－20 番手の太糸が綿糸流通の大半を占めていた在來セクターの時代から，足踏み織機あるいは力織機などの新しい生産用具で廣幅薄地の改良土布あるいは機械製綿布を生産する近代織布業が勃興して，その原糸となる 40 番手前後の細糸が多量に流通する近代セクターの時代へと移行していく過渡期であった。

清朝末年に北洋實業新政などを契機に導入されはじめた足踏み織機は，民國成立以降も高陽のような農村織布地帶や都市の小規模工場に徐々に浸透していた。このように徐々に萌芽しはじめた近代セクター向けの細糸は，ほとんど日本綿糸が供給していた。このため 1910 年代前半における日本綿糸の對外輸出は，主力の 16 番手，20 番手の太糸でなお增加傾向にあって量的擴大を續ける一方，30 番手，32 番手，42 番手，さらに 60 番手，80 番手などの高番手糸も徐々にではあるが供給を增やし，若干の質的向上も進んでいた。日本輸出綿糸の平均番手は，1910 年上半年には 16.8 番手であったが，14 年下半年には筆者が在來セクターと近代セクターの境界線と見做している 20 番手ちょうどに上昇したのである。

このような傾向は，第一次世界大戦の勃發で歐米からの廣幅薄地機械製綿布の輸入が途絶して價格が高騰し，中國國内においてその代替品である改良土布あるいは薄地機械製綿布の生産が隆盛にむかうと，一擧に加速した。輸入代替品生産の原糸となる日本製の 42 番手單糸さらには 42 番手撚糸が，天津，上海などを中心に大量に供給されるようになり，

日本輸出綿糸の平均番手は，1915年上半年の20番手から1919年下半年の27.3番手，さらに20年上半年の29.5番手へと跳ね上がった。このような高番手化という質的向上の一方で，日本の輸出用綿糸はかつての主力であった16番手，20番手の太糸分野で中國國產綿糸の前に完全に競爭力を失い，輸出高は激減して量的縮小が急速に進行した。

第一次世界大戰を契機にして東アジア規模で出現した綿工業製品の生產・流通における構造的再編を前にして，日本の巨大紡績資本は大戰期間に蓄積した膨大な超過利潤を背景に，附加價値の高い細糸は日本國內で，附加價値の低い太糸は中國の上海あるいは青島で生產するという國際的な規模の分業體制を構築した。第一次世界大戰がもたらした狀況に對應して構想された太糸工場の中國へのシフトは，1920年代前半に雪崩をうって進められた。しかし太糸の供給過剩という構造的な原因による「1923年恐慌」を契機にして，太糸專門で進出したはずの在華紡は，大戰期に成長をはじめて「1923年恐慌」以降に本格的な發展段階にはいった近代セクターの織布業向けの細糸に生產シフトしはじめた。こうして中國紡績業は，多くが在來セクター向けの太糸を生產する中國資本，イギリス資本の紡績工場と，多くが近代セクター向けの細糸を生產する在華紡とが竝存する重層構造に再編されることになったのである。

本稿で引用した新聞記事は，「神戸大學附屬圖書館新聞記事文庫」に收錄されているものを利用した。特に記して謝意を表したい。